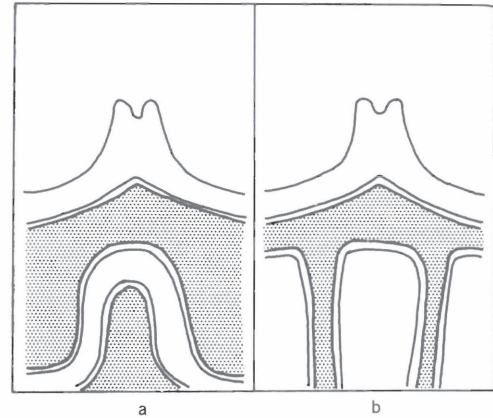


1982

- 4) 大川清『千葉県市原市永田・不入須恵窯跡調査報告書』1976
- 5) 藤崎芳樹「市原市小谷田八木遺跡の弥生式土器」『研究連絡誌』第3号 1983
- 6) 穴倉昭一郎「齊藤栄庵氏旧蔵の石剣」『市原地方史研究』第7号 1970
- 7) 穴倉昭一郎「養老川中流域発見の土偶」『南総郷土文化研究会誌』第6号 1968
- 8) 本例のような把手について、「鳥形把手」として報告されたものがある(橋口・高橋1979, 藤巻1981他)。しかし管見の限りでは、鳥頭部を中心に表現されたものが全てである。一方、弥生時代以降の「鳥形土器・土製品」には、体部まで表現したものが多くみうけられる。これより本例のような形状のものについては、「鳥頭形把手」と呼称することとしたい。
- 9) 金子浩昌他『貝塚出土の動物遺体一関東地方・縄文時代貝塚の動物相とその考古学的研究一』『貝塚博物館研究資料』第3集1982では丘陵部に近い貝塚から多く出土。
- 10) 千葉県文化財保護協会『千葉県の貝塚一千葉県所在貝塚遺跡群詳細分布調査報告書』1983
- 11) 縄文施文部分が、胴部文様帯のなかで、文様意匠としてネガ・ポジのいずれかに属するかによるものと思われる。つまり胴部文様帯の一例として示した、推定模式図aは、残存部分下部に僅かにみられる沈線が、仮に地文である縄文部分と胴部文様である無文地を区画する場合、(加曾利E式末葉)と、前出の沈線が、「ハの字」状沈線と相関し、縄文帯を形成して、それによって胴部文様帯をつくるbの場合(称名寺式)



が考えられるが、残存部僅少の為、推定の域を出ない。

- 12) 今村啓爾「称名寺式土器の研究(上)」『考古学雑誌』第63巻第1号 1977
- 13) 藤巻幸男他『清里・陣場遺跡』1981
- 14) 東北地方出土例に、鳥形土製品?(把手?)が散見される。時期は中期であるが詳細不明。『村山市史』別巻1 原始・古代1983
- 15) 佐藤次男「縄文時代における蛇形装飾付土器について一とくに茨城県内の出土資料を中心にして」『茨城県立歴史館報』9 1982
- 16) 金関恕「鳥とシカへの信仰」『古代史発掘④ 稲作の始まり』1975

註以外の参考文献

- 小川和博「成田市加定地遺跡発掘調査報告書一縄文時代編一」『成田の文化財』第九輯、1978
能登健他『三原田遺跡 資料合冊』1977
橋口尚武他「茨城県常北町片山遺跡の表採遺物」『考古学雑誌』第66巻第3号 1980

千葉急行線内草刈貝塚で発見された イノシシ頭骨と焼土堆積遺構について

田井 知 二

千葉県市原市草刈所在の草刈貝塚は、環状にめぐる縄文中期の貝塚で、東京湾に流れこむ村田川をのぞむ標高30m程の台地の上にある(註1)。

草刈貝塚は千原台ニュータウンの建設に先立って千葉県文化財センターによって1980年から調査が行われ、貝塚部分の約 $\frac{2}{3}$ の発掘が終わっている

(註2)。

千葉急行線内草刈貝塚は1982年10月から6ヶ月間にわたって発掘が実施された。この発掘で貝塚南側の一部の様子が明らかになった。この中で覆土に多くの焼土を含むこと、イノシシの頭骨を出土したことで調査中から注目を集めた遺構があっ

た。この遺構の性格については当時からいろいろ推測されたが結論はでなかった。今回、多くの方々から御教示を頂ければ幸いと思い、ここにその遺構を紹介し、合わせて若干の私見を述べたいと思う。

※

イノシシの頭骨、焼土は阿玉台期もしくはそれ以前の住居址と考えられる竪穴状遺構の覆土から出土した。以下にその概略を示す(註3)。

(位置) 台地が平坦部から南側の谷へ向かって傾斜を始める部分、貝塚全体の中でみれば環状に発見される遺構群の南西部分、その中でも最も外側に位置する。(形態) 確認面(ローム層上面)で約3.8m×3.5mの長円形、底面までの掘り込みは約30~50cm。(覆土) (1) 褐色土層、耕作土。(2) 混貝土層、おおよそ(3)層の上のもの、下のものに分けられるが内容は同一、黒色土に多量の貝を混入する。殻長が5~10cm程のカキ・アカニシが目についた。(3) 焼土層、最も厚い部分で20cmほどある。しかし単一の層ではなく、ごく薄い灰層、焼けた貝(カキが多い)を多く含む層などが間にあって細分が可能である。(4) 灰層。(5) 黄褐色土層。(6) 黒色土層ないし褐色土層。(5),(6)層ともに遺物、貝をほとんど含まない。(遺物) 土器・フレーク・獣骨・貝などがある。その大部分が(2),(3),(4)層から出土している。また中央や南寄り(図4点線部分)では遺物が集中する場所がある。この集中範囲の中心からやや東へ寄った所でイノシシの頭骨が1個体発見された。この頭骨は全長30cm以上の大きなものでほぼ完存している。口先をほぼ北北東に



図1 遺跡の立地 (1/25,000 蘇我)

向け(6)層直上に置かれたような感じであった。頭骨の周囲には阿玉台式土器の破片、1ないし2個体分、黒よう石のフレーク数点、別個体と思われる動物の下顎骨の一部分、カキ、マテガイなどが集中していた。なお一部分の貝を除いて遺物が直接火を受けた形跡はないように思われる。(その他) 炉・柱穴・ピット等は全くみつからなかった、遺構それ自体が火を受けた跡はない。



図2 セクション(c-d)



図3 イノシシ頭骨の出土状態(北東から)

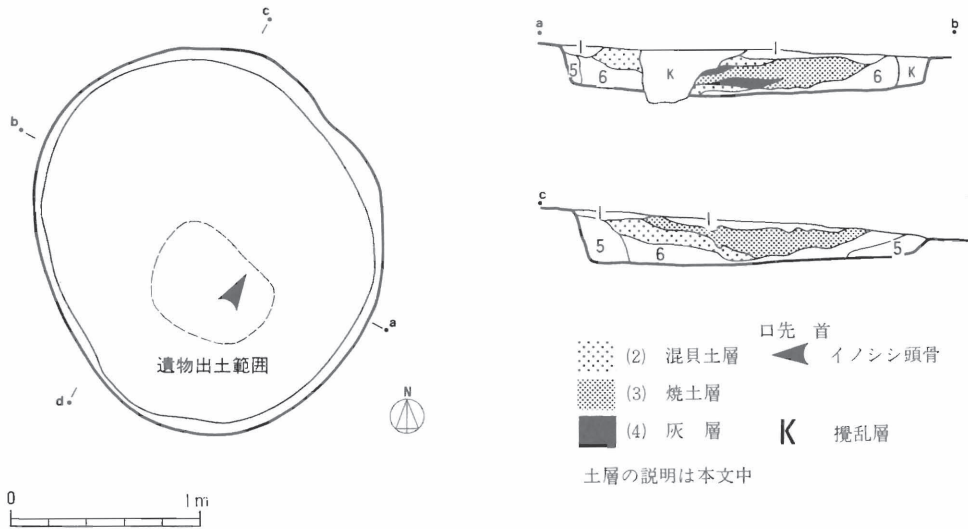


図4 遺構実測図 (1/40)

以上のような状況をまとめてみると次のようになろう。

- 竪穴状遺構はその形状から阿玉台期の住居址と考えられる。
- イノシシの頭骨の配置、焼土の堆積は、住居址が廃棄され、ある程度埋まった後の皿状のくぼ地を利用して行われた。
- イノシシの頭骨はその出土状態からみて、何か意識されて「置かれた」可能性が高い。
- 焼土は何回かに分かれて堆積していて、その量からみてもこのくぼ地がかなりの期間意識された場所であったと思われる。
- (2), (3), (4) の各層は含まれる遺物からみても時間的な差はほとんどないものと考えられ、一連の堆積物として問題ないと思われる。

※

草刈貝塚の例はこのようにまとめられた。

次にいくつかの類例について簡単にみてみよう。

- 東釧路貝塚（北海道釧路市）早期・前期 貝層中から複数のイルカの頭骨が、放射状に並べられて発見された。
- 大畑貝塚（福島県いわき市）後期 貝層中の砂層直上に約20㎡の範囲内で、イノシシの頭骨3個体、殻長30cm程の巨大なアワビ72個、石棒、完形土器など多くの遺物が「整然と配置」されていた。
- 社台Ⅰ遺跡（北海道白老町）後期・晩期 墓域内に焼土と焼骨を含む遺構が発見された。焼骨

はエゾシカを中心にイノシシ、ヒグマ、キツネなどがみられた。

- 金生遺跡（山梨県大泉村）晩期 土壇の中から火を受けたイノシシの幼獣の下顎骨が多数出土した。

また千葉県内でも竪穴住居址内の貝や獣骨の集積(幸田貝塚、松戸市)、大型イノシシ頭骨の単独出土(堀ノ内貝塚、市川市)、土壇内の焼土堆積(荒屋敷貝塚、千葉市ほか)などの報告がある。

これらの報告の多くは①特別な部分の骨だけがまとまっている②骨が焼かれている③遺物が規則的な配置をとるなどの点から、「物送り」的行事を通じての豊漁豊狩の祈願遺構とか、火に関わる祭祀としてとらえ、なんらかの「儀礼」に関係しているものとして評価している。(しかし、その評価の程度については、貝塚それ自体を当時の精神生活の表れであるとする積極的なものから配石などの遺構を伴うなど、明らかに人為的な配慮が加えられていると認められる時にはじめて「儀礼」と結びつくとする慎重なものまで様々である。)(註4)。

※

以上の類例を参考にして最後に本遺構について現時点でのまとめをしておくことにする。

今回の報告例は①イノシシ頭骨の出土が1個体分だけであること②一部分の貝を除いた骨・土器などほとんどの遺物が火を受けていないこと③頭骨・貝以外の遺物はほとんど通常の出土状態と変

わらないこと、などの点からみて確実に人為的な配慮がなされたとするにはやや根拠が弱いような感じを受ける。しかし①頭骨のみが「置かれた」状態で出土していること②焼土の堆積はその量からみても「普通」ではないなどの点でこの遺構が何か特別の意識を持って扱われていたことは確実であろう。そして、その意識が(いくつかの調査例が示すのと同じような)何かの「儀礼」に関係したものであった可能性は高いといえるのではないだろうか。(5班 柏事務所)

註

1) 「千葉県の貝塚」千葉県文化財保護協会 1983

- には下切付貝塚、扇ヶ谷貝塚として記載がある。
- 2) 「千原台ニュータウンII」千葉県文化財センター1983
 - 3) 全ての記載は発掘時の観察によっている。今後整理の進行に伴って見解が修正される可能性もあることを断っておく。
 - 4) 「いけにえ」の起源をさぐる」土肥孝 1983「アニマ」No.121 平凡社
「縄文時代の動物と儀礼」西本豊弘 1983「歴史公論」No.94 雄山閣 等を参考にした。なを個々の報告書名については省略した。

「群小区画墓」の終焉期

—所謂「方形周溝遺構」をどう見るか—

渡 辺 修 一

1. 問題の所在

かつて佐原真氏は方形周溝墓を他の墓制と対比する際、「区画墓」という語を用いた(註1)。それは確固たる概念として定着した用語ではないが、筆者は後期群集墳等も含めて「群小区画墓」(必ずしも周溝を有するとは限らない。それらの多くが持つ「墳丘」は本来副次的要素として出発するが区画という意味において周溝にとって換わることもあり得る。)と総称したい。かかる「群小区画墓」は、その造墓主体の占地性及び造墓時の労働と群構成の共同性の両面において、すぐれて農業共同体社会の墓制という本質を有し、弥生時代中期から古墳時代の数百年間を規定する要素と考えるからである(註2)。

ところが古墳時代以降とされる「方形周溝遺構」なるものが、千葉県を中心に急激な類例の増加を見ている。これが筆者の考える「群小区画墓」としてよく、また奈良、平安時代にも存在したとするなら、その歴史的意義が問題となる。しかしそれらは、漠然と墓ではないかとされながら、正確な時期と性格の決定は困難を極めてきた。その中で、最近ようやく金丸誠氏と山岸良二氏がこの問題について重要な発言を行なった(註3)。

金丸氏は「方形周溝」と「円形周溝」を一括し、それらを「古墳時代後期から歴史時代における、明確な形状での埋葬主体及びマウンドを遺存しな

い方形ないし円形状の溝からなる墳墓の遺構」として「墳墓」たる「古塚古墳」と峻別する。またその後の佐倉市立山遺跡の報告(註4)では時期を限定し得る良好な資料を得、6世紀～8世紀後半という年代観を裏付けた上で、古墳と「方形・円形周溝」の差を「古墳時代後期以降奈良・平安時代における一地方社会における階層差」としている。しかし、金丸氏にあつては「方形・円形周溝」が本来的に埋葬主体とマウンドを持っていたと考えられており、規模や周溝形態に求められる古墳との区別の基準が不明瞭であつて、「階層差」の本質もいま一つ判然としない。加えて「方形周溝」が古墳より遅れて終末を迎えることの説明が困難であろう。

一方山岸氏は次のように言う。「方形周溝状遺構」は、「一時的中断や確執」がありながらも形態面で「方形周溝墓」を受け継ぎ、性格面では「墓」としての機能が希薄化して「葬送の一部を催行する場等のために残存した遺構ではないか」しかし「和泉式～真間式期」(山岸)がはたして一時的な中断という言葉で片付け得るだろうか。規模や形態の類似だけで「方形周溝状遺構」と「方形周溝墓」を直接結びつけるには、それらの間のヒアタスは大き過ぎはしまいか。また「墓」以外の機能を考える根拠も薄弱であろう。

「方形周溝遺構」は後期群集墳と混在するものが